



TITLE:

<大會抄録>「近代」に直面する遊牧民：ヤージュ・ベディルの事例から

AUTHOR(S):

江川, ひかり

CITATION:

江川, ひかり. <大會抄録>「近代」に直面する遊牧民：ヤージュ・ベディルの事例から. 東洋史研究 2001, 60(3): 562-563

ISSUE DATE:

2001-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155389>

RIGHT:

國制が、いつ・どのようにして成立したのか、という問題に對しても、一定の見通しを立てておきたい。これが第二點である。その際、同時代の中國王朝からの影響もさることながら、五胡||高昌郡時代や、先行する諸氏高昌國時代からの繼續性にも注意を拂いたいと思う。

アクバル時代末期の史料について

—— いわゆる『アフワリー・アサド・ベグ』を中心に ——

眞 下 裕 之

アクバル時代の公式の王朝史『アクバル・ナーマ』は著者の暗殺により治世第四七年初（一六〇二年）までの記事をもつて中絶している。このため、以降アクバルの死去（一六〇五年）までの時期については、同時代史料がきわめて乏しく、詳細な情報は後代に編纂された年代記に據るはかない。

このような史料状況において、その時期にアクバルに仕えた人物によって書かれた記録である、いわゆる『アフワリー・アサド・ベグ』は貴重な同時代史料として利用されてきた。

にもかかわらず、本書の校訂本はいまだ存在せず、ごく部分的な翻譯が公刊されているに過ぎない。また本書の史料論を試みた研究も皆無である。

そこで、本研究は、今日知られる本書の寫本六點を検討した上

で、

- 一、寫本系統の考察をふまえて校訂本作成への指針を示し、
- 二、著者の履歷、著作時期などの検討から、基礎的な史料論を示す。その上で、
- 三、他の史料との對照において史料の價値を検討し、
- 四、この時期に關する史料全般の諸問題にも論及する。

「近代」に直面する遊牧民

—— ヤージュ・ベディルの事例から ——

江 川 ひかり

ヤージュ・ベディルは、西アナトリアにおいてオスマン朝の行財政機構に組み込まれることとなった遊牧民グループのひとつである。一五三〇年、ヤージュ・ベディルは、「ヤイジュラル・ユリユクレリ・ジュマアティ」として知られ、行政的にはマニサ縣ギョルデキ郡に歸屬していた。當時納税對象戸として一戸が、一八世紀初頭には約八〇戸が、さらに一九世紀中葉にはバルケスイル地域にあわせて二四七戸が存在した。このことからヤージュ・ベディルは、人口増加と新たな經濟力の獲得とにもなつて、ギョルデキ周辺から生活の場を擴大していったと考えられる。ヤージュ・ベディルは、もともと弓（ヤイ）を製造してきたことよつて古くから「ヤイジュラル（弓職人）」という名で知られてきた。例えば一六世紀前半には一一〇一二の弓を、一八世紀初頭には八〇〇八一の弓

を税として納めることが課せられていた。その後、弓の需要が低下し、時代の経過とともに「ヤイジュ」という名稱は、より發音しやすい「ヤーシュ」へ變化したと考えられる。經濟活動の觀點から彼らにとってじゅうたん製造および畜産業もまた重要な位置を占めていた。ところが一九世紀中葉、彼らのうちの數家族は農業に従事しており、彼らがじょじょに定住化の過程を歩んでいったことが明らかにされた。一九世紀後半には強制的定住をよぎなくされたが、今日もなお彼らは天然染料を用いてじゅうたんを家の中で織り續けている。

アンディジャン蜂起再考

小松久男

アンディジャン蜂起は、一八九八年五月一八日未明、フェルガナ地方東部のムスリム約二千名が、ナクシュバンディー教團の導師ドゥクチ・イシャーンの指揮下にアンディジャン駐屯のロシア軍に攻撃をかけた事件として知られている。報告者は、かつてこの事件について論文を發表する機會を得たが（『アンディジャン蜂起とイシャー』、『東洋史研究』第四四卷第四號、一九八六年）、ソ連時代の制約のために利用することのできた史料には限りがあった。しかし、ペレストロイカ以後の激變の中で研究環境は大きく改善され、現地の研究者との意見交換はもとより、史料の可能性も開かれた。この蜂起について言えば、ドゥクチ・イシャーンの自筆本とされる

『思慮なき者への訓戒』、彼のおびただしい奇蹟に關する傳承を集めた寫本、また同時代のムスリム知識人の著したフェルガナ史などの史料が利用可能となっている。これらの史料は、これまで不明であったドゥクチ・イシャーンの思想と活動、さらに彼の教團の實態について多くの手がかりを與えてくれる。一方、ロシアに對するジハードという彼の行動については、同時代から相反する評價があったが、この問題は蜂起から一世紀を経た現代においても傳統的なハナフィー派ウラマーとイスラーム復興主義者との間の争點となっている。今回の報告では舊稿の不足を補うとともに、この蜂起を中央アジアにおける再イスラーム化という視點から再考してみた。

清代中期の冒捐冒考問題

岸本美緒

清代中期の乾隆三〇（一七六五）年前後より、中國各地で冒捐冒考問題即ち捐納や應試の資格をめぐる訴訟や紛争が頻發したことを背景に、報捐應試を許される者と禁じられる者との範圍に關して、禮部を中心に、問題となる個別事例に即した論議が積み重ねられた。その結果、同じく衙門で應役する人々のなかでも、庫丁・斗級・民壯は報捐應試してもよいが、馬快や門子・弓兵等はいけな

い、というように、細かい規定が作られてくる。それらの規定は、例えば嘉慶一七（一八一二）年の『欽定學政全書』卷四三「區別流品」のなかにまとめて見ることができる。では、どのような人々